

ヤマト福祉財団 NEWS

ヤマトグループ賛助会員向けニュース(季刊)

発行部数12万部・非売品

YAMATO WELFARE FOUNDATION

No.42

4月20日発行 2014 Spring

[有富理事長を囲んで]

障がいのある方が

誇りを持って働くために

今、私たちにできること



左から有富慶二ヤマト福祉財団理事長、森下明利ヤマトグループ企業労働組合連合会会長、西澤 心社会福祉法人まいづる福祉会理事



東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金
助成先を訪ねて

安心して暮らし、働ける町へ
被災地3年目の春 p10

私たちの賛助会費が活かされています

■障がい者福祉助成金 助成先レポートVol19(京都府与謝郡与謝野町)

手作業にこだわり
九条ネギで、時流の変化に立ち向かう p08

この街で一緒に生きていく
障がい者のクロネコメール便配達

変化する町と一緒に、自分たちの地図も新しくなる。 p16

夢へのかけ橋
プロジェクト



経済的な自立力を備えた
新しい福祉に向かって

有富理事長
を囲んで

障がいのある方が誇りを持って働くために

今、

私たちにできること

今回の鼎談には、助成先の施設を訪問されたヤマトグループ企業労働組合連合会 森下明利会長、そして第8回小倉昌男賞受賞者であり、今年度から開講する新しい実践塾の塾長・西澤心氏をお招きし、「障がいのある方の夢をかなえるために今、なにが必要か」それぞれのお話を伺いました。

「学ぶ・実践する・助成する、三位一体で効果を」

有富理事長

有富慶二理事長(以下…理事長)本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。まず私たちヤマト福祉財団の役割について説明をしたいと思います。

企業というのは、儲けるだけではなく、社会における存在意義を持つ必要があります。私はこれを「社徳」と呼んでいます。これがなければ企業が存続することはできません。ヤマトグループでは10項目の企業姿勢を掲げて社徳を高めています。この中に、ヤマ

トグループらしさを象徴するものが三つあります。一つは「安全第一」で、これは現場の仕事です。二番目が「世の中から非難されるようなことを決して行わない」であり、これは執行部の仕事です。そして、もう一つが「障がい者の支援」です。この障がい者支援を、私たちヤマト福祉財団が仕事としてしています。こうした役割分担をご理解いただいた上で、さらに知

っていたいただきたいのが、日本の障がい者が置かれている現状です。

西澤 心氏(以下敬称略) 障がいのある方の働いている人数ですね。

理事長 そうです。厚生省が発表した日本の障がいのある方の人数は、約800万人で、そのうち15歳から64

歳までの人、いわゆる仕事ができる年齢の方は約500万人います。企業が雇用義務として2%雇用し、その数は約40万人。さらに社会福祉法人、NPO法人などの福祉施設は、全国におよそ7000カ所あり、そこで約20万人が働いてい



有富慶二理事長

ます。でも合計すると60万人弱しか働くことができていません。500万人のうち約440万人に仕事がない計算です。施設で働く約20万人の人数を早急に増やしていかねばなりません。さらに、考えなければいけないのは、障が

いのある方の給料です。施設作業所で働く人の平均給料は月収約1万3000円となっていますが、これでは障がい者年金を入れても年間90万円くらいにしかなりません。日本の可処分所得の中央値は224万円。OECDの基準値

で貧困線を算出すると112万円となり、そこにも到達していない

ことになりません。これらもなんとかしなければなりません。

「すぐ取り組むべきミッションは 利用者の給料を上げること」 西澤氏

西澤 問題なのは、500万人働ける人がいるのに、福祉的な支援を得ている人は20万人しかないこと。きょうされんで調査した施設で働く9000人のうち約56%が貧困線以下だということ。日本の制度の改善も必要ですが、現場の人間としてすぐにでも取り組むべきミッションは「給料を上げること」だと思います。実際に月給5万円を超えるいくつかのパイオニアたちが、ヤマト福祉財団

の支援により誕生しています。ね理事長 私たちは、全国の施設に「働いて稼げる事業所」に変わっていきましよう」と呼びかけ、経営とはなにかを学ぶパワーアッププログラムを開催してきました。しかし、座学で勉強しただけで、簡単に実践できるものではないんですね。そこで一昨年、経済的に自立した福祉施設として成功を取っている新堂^{※2}さん、武田^{※3}さんの二人に商売を学ぶ塾を実験的に開いてもらい



社会福祉法人まいづる福祉会理事 ワークショップほのぼの屋施設長 CAFE RESTAURANT ほのぼの屋支配人 西澤心氏

塾の名も「夢へのかけ橋 実践塾」と変え、新たに亀

■障がいのある方に、もっと働ける場所を

●障がいのある方の約800万人のうち働ける年齢の方は約500万人います



15歳から64歳までの働ける年齢の方約500万人

●約500万人のうち働くことができているのは約60万人だけ



企業や福祉施設などで働いている方約60万人
企業の雇用人数約40万人
施設などで働く人数約20万人

●約440万人が働く機会を得られていません

全国約7000カ所の福祉施設などを もっと多くの利用者さんが働ける場所に

※社会保障審議会障害者部会（第50回）平成25年7月18日資料より推計

■障がいのある方に、もっと高い給料を

●障がいのある方の年間所得の平均は最低限の生活を営むライン＝貧困線を下回っています



※貧困線とは、生活に必要な最低限の物を買うだけで、娯楽、嗜好品を買う余裕がない収入状態を示す指標。OECDの作成基準に基づき算出。
・障害基礎年金（2級）…78万6500円
+
・平均給料…1万3000円×12ヵ月
※福祉施設作業所の平均給料 1万3585円（平成23年度厚生労働省）

ました。すると参加した施設の中から、大きな成果を上げるところが誕生してきたのです。だったら、パワーアップフォーラムと塾と助成の三つを一括してやったら、より効果があがるのではないかと考えました。つまり「学ぶ・実践する・助成する」の三位一体です。それが昨年からスタートした「夢へのかけ橋プロジェクト」です。

井さんにも塾長になっていただきました。三つの塾に58人の塾生が参加し、初年度月給3万円、2年後に月給5万円実現を目標にしています。給料増額につながる塾生のプランには、すぐに助成を行えるようにし、実際に新たな事業をスタートした施設もあります。

屋の塾「みたいなイメージで協力いただくことにしました。」

しかし、1年間塾を進めて行く中で、新たな課題も見えてきました。塾生にとっては、業態ごとにノウハウを学べる方が、より効果的だとわかってきたのです。そこで、今年度からは西澤さんにも新たな塾の塾長になってもらい「食べ物

西澤 私としては、これまで飲食関係で頑張ってきたノウハウなどをお伝えしたいと考えています。とりあえず12年間つぶれずにレストランをやったこれからです（笑）。でも私たちの施設でやってきたのは「利用者さんが主体的に働ける環境をつくること」、それだけなんです。先日、森下会長にも見ていただきましたが、うちでやっていることは、すべて利用者さんが、自ら考え、実践してきたことです。

「ほのぼの屋の利用者さんは 誇りを持って働いている」 森下会長

森下明利会長（以下敬称略） 西澤さんが施設長をされているフラン

ス料理のレストラン「ほのぼの屋」を拝見させていただきましたが、

※1「障害のある人の地域生活実態調査」きょうされん調査（2011年調査2012年10月発表）
※2小倉昌男賞受賞者 新堂薫氏（チャレンジャー施設長） 武田元氏（社福）ほらから福祉会理事長
※3亀井勝氏（社福）ひびき福祉会理事長



ヤマトグループ企業労働組合連合会
森下明利会長

そこで働いている利用者さんは、一人ひとりが自分の仕事に自信を持っていきます。たとえば、ナプキンをクリーニングしている人は「これはお客様が口を付けるものだから、きれいにしなければならぬ」とそんな誇りを持って仕事に取り組んでいました。しかも、それを自分が実践するだけでなく、彼らが新人に教えているんです。ここを訪れるお客様が、食事はもちろん、この場の雰囲気と時間を楽しみに来店されていることをわかっていくからこそできるんでしょうね。

西澤 新しいメンバーが入ると、彼らは自分たちで仕事を教えていきます。自分の仕事を人に伝えることで、「こうしなければいけない」と自らにもフィードバックしていると思います。

森下 シルバーの並べ方にもこだわりがありましたね。

西澤 ナイフ、フォークはツープインガーの間隔で並べてますね。グラスの置き方もこの位置が良いと彼らが考えて決めていったんです。私が手を出すと、二度手間になるからダメとさわらせてもらえませんが（笑）。本当に私はなにもしていませんが、ただ最初に一つのことでだけは決めました。それは「障がいを持っていて人が頑張っているから食べにきてくださいではなく、きちんと市場で通用する一流のお店を目指そうじゃないか」ということです。そのために一流の

料理長に来ていただきました。他は私も含めてみんな素人でしたけど、障がい分野で私たちは勝負するのではない、という意識です。とやってきています。

理事長 そのために、なにを行ったのでしょうか？

西澤 まずはマーケティングをいから勉強しました。その上で、きちんとターゲットを設定し、お店のコンセプトをみんなで作ったんです。サラリーマンにワンコインで食べてもらえる店、隠れ家的な店など、いろいろな意見が出る中で、40〜60歳の女性をターゲットにしようと思えました。いわゆる関西のおばはんですね。彼女らは味方のでければ頼もしいけど、敵に

回したらとんでもない。良いお店のことは「だれにも言ったらあかん」と口コミで時間をかけてジワジワと評判が広がっていくのですが、悪い店だと思ったら「あそこはあかん」と一日であつという間に広がってしまう。

森下 関西は、そういうところがありますね（笑）。ほのぼの屋が、中高年の女性をターゲットにしたお店だということは、レストランに入った瞬間に、私にもわかりました。そういう

いい。良いお店のことは「だれにも言ったらあかん」と口コミで時間をかけてジワジワと評判が広がっていくのですが、悪い店だと思ったら「あそこはあかん」と一日であつという間に広がってしまう。

森下 関西は、そういうところがありますね（笑）。ほのぼの屋が、中高年の女性をターゲットにしたお店だということは、レストランに入った瞬間に、私にもわかりました。そういう

料理長 商売で大切なのは、だれになにを売りたいか、市場のセグメントですね。料理も、使うお皿も、店の雰囲気も、どうしたら良いかわからないというところは、対象がぼやつとしているからでしょう。全員に売りたいなんて商品は誰も買ってくれない。釣り師は、特定の魚を釣りたいから、釣りの仕掛けを工夫する。なにも考えずにただ仕掛けを放り込んで釣れるはずがない。

西澤 そのたとえばは、わかりやすいですね。

理事長 だれに買ってほしいのかを考えていくことで、どうしたら良くなるのかが見えてきて、次の来店にもつながる。そういうった考え方を浸透させていくことも、利用者さんが主体的に働ける環境づ

点で、コンセプトは明確に形になっていきます。大事なのもう一度来たいと思えるリピーターをつくることだと思えますが、西澤さん

のレストランは、料理も雰囲気ももう一度来たいと思える素晴らしいお店になっていますね。



「釣りたい魚に合わせた仕掛け
それが市場セグメント」 有富理事長

くりの一つといえるでしょう。他の福祉施設は、お客様が買ってくれるものをつくるのではなく、自分たちのつくれるもの、つくりたいものになっているから売れないんです。西澤さんのところの大きな違いはここでしょうね。

西澤 時間のセグメントも大切です。土日は、飲食店にとって大切なかき入れ時。それを理由に休んでいるは商売になりません。

理事長 商売とはなんだということをしつかり勉強してほしいんです。商売の基礎の基礎といえは、経理ですが、西澤さんはこれについてはどう考えていますか。

西澤 施設関係者は、経理をきちんと学ばなければいけませんね。そもそもこの業界には計算高いような人は入ってこない。だから施

設のトップは経理に疎いし、現場のスタッフも計算ができていない。そのため、今年はどういう予算でいこうとか、最初の計画段階ですでにつまづいているケースが多いのです。損金という言葉もわかっていない、つくったものはすべて売れると勘違いしている。また、商品価格の設定も、原料費がいくらかかるからこれだけの金額を上乗せしなければならぬ、ということもできていない。これでは、一般のお店の商品との差別化を図ることはできません。

理事長 この「商売とはなにか、経理とはなにか」の二つに関しては、もっと企業がお手伝いできるのではないかと考えています。企業が自ら障がいのある方を雇用することも大切ですが、自分たちで実践している経理のノウハウを施設に

「私たちのお金がどう役立つっているか みんなに伝えていきたい」

森下会長

理事長 森下会長は、今回、西澤さんのところと、もうひとつ別の施設も見学に行かれたんですね。

森下 はい、ジャンプアップ助成金で九条ネギの育苗ハウスを設置された野田川共同作業所に伺いました。

理事長 育苗ハウスの他に、上水道なども設置したと聞いています。

森下 立派なものが完成していましたが、九条ネギの出来は、良い苗をつくれるかどうかで決まるらしいのですが、それを実現するための

教えることで、施設は、PDCA (Plan・Do・Check・Action) にならなければならないかも知れないように、商売として事業を行う力もついてきます。

それが積み重なれば、いま施設で働いている20万人の数も増えていくはずですよ。大事なものは、60万人の方しか働くことができない現実をどうやって改善していくか。私は今まで給料を高くする方法をずっと考えていましたが、それだけではダメだとわかってきました。

そこで、西澤さんや他の塾長のように成功している施設のやり方を、他の施設がわかりやすく業態別に検索できる方法はないか。ベンチマークとして、よりみんなの参考になる情報を発信できないかと考えています。

遮光カーテンや温度を一定に保つ

ストープなども備えることでできたと、みなさん喜んでいました。近年、野田川共同作業では、いままです注していた下請けの仕事が海外に流れてしまつて苦労されています。

そこで、お客様の求めるもの、利益率の高い九条ネギを事業の柱に方向転換するために、助成を申請したということです。

理事長 九条ネギは商品価値も高いので、たくさん売れば給料も上がりますよ。仕事を増やす、給料



を上げる、まさに生きたお金として助成が使われていく姿を目撃されたわけですね。

森下 利用者さんと一緒に水やりを行うなど良い体験ができました。利用者さんたちは、自ら土に触れて種蒔きを行い、自分たちの手で大切に九条ネギを育てています。そんな手塩にかけた商品が、身近なラーメン屋やふるさとセンターなどで売られているのだからうれしいですよ。いく先の見えない下請けの仕事より、実際に世の中でどう役立つっているのかがわかるこの仕事の方が、喜びはずっと大きいはずですよ。それで給料も上がっていくのですから、理想的です。

今回の訪問で、私たちがカンパしたお金が、具体的に利用者さんの夢を広げることに役立っている、それを実感できたことは、とても大きかったと思います。

理事長 自分のやったことが、人の役に立っているとわかった時は、うれしいものです。

森下 社員は自分たちが汗水流したお金をカンパするのですから、そのお金がどんな目的で、どのような形で使われているのかわかる権利があるし、私たちは伝える義務があると思います。なにをしていくかわからないけど仕方ないの出す千円と、実際にどう役立つているのかを知って出す気持ちのこもった千円では違いますよね。今回、見聞きしたことを研修会などでしっかりと伝えていくつもりです。

理事長 私たちもみなさんからのカンパを受け取る時、「有効に使わせてもらいます」と言ってます

「障がいのある方が当たり前」に働いている社会、それが究極」

西澤氏

森下 もう一つ感じたのは、私たちは障がいのある方のことを知らな過ぎる、変に特別扱いし過ぎているのではないかとということでした。

理事長 それはどういうこと？

森下 西澤さんは、ほのぼのの屋で働く利用者さんを特別扱いなんかされていませんよね。私たちが社員と接しているのとなにも変わらない。私たちは、障がいのある方と一緒に仕事をすることに慣れていないのかもしれないが、私たちはつい身構えて、特別扱いしてしまう。でもほのぼのの屋で働くみなさんを見ると、当たり前前に一人の社員として接することこそ、大事なのではないかと感じました。それは彼らの仕事を周りが認めている証拠であり、障がいのある方にとっては、働く上での一つの誇りになるのではないかと考えています。

理事長 確かに働く場を提供す

「私たちが置き忘れてきた大切なものをみなさんに教えてもらった」

森下会長

理事長 先ほど給料が上がる話が出ましたが、利用者さんの夢をかなえていくためには、給料も上げ

ていくことが大切ですね。
西澤 給料が上がると利用者さんたちは変わっていきまますよ。うち



が、それで自分たちにプレッシャーをかけているんですよ。

る側には、障がいのある方のその辺の気持ちは見えていないかもしれないですね。

西澤 私が思う究極の形は、普通に障がいのある方が働いている社会です。企業に障がい者がいるのは当たり前で、企業の就労が難しい方にも働く環境が整った施設で、ごく普通に働いてもらうことが理想です。

の事業所ではじめて2万円を超えた時、みんなの働き振りが変わって驚きました。働いた分、給料がついてくるからと残業も苦にしなくなりましたし、もっと売れるよう

にと営業トークも自ら行うようになりました。5万円を超えると、いままでも家族に任せていたお金の管理を自分でやるようになり、着るものに無頓着だった人がおしゃれ

に目覚めたり、買い物を楽しむようになり変りました。さらに8万円を超えると、自分の将来設計や夢を思い描き、その実現の一步を踏み出すようにもなったのです。ひ

社員のカンパはどう役立てられている？

【森下会長が二つの施設を訪問】

『野田川共同作業所』に森下会長が訪れたのは、昨年のジャンプアップ助成金を使い、九条ネギの育苗ハウスを2週間前に建設したばかりの時でした。

ます。料理を堪能した森下会長は、行き届いたサービスに感激されていました。そのすべてが利用者さん自ら考えたものだと言っていて驚いていました。

「新しい育苗ハウスでは、種蒔きからたった7日間でもう芽が出ています。これなら育苗も順調に進み、収穫も期待できます」と小谷勝己所長。自分たちの助成が、利用者さんの夢を広げること、しっかりと役立つに、そんな姿を目の当たりにできました（野田川共同作業所の詳細な報告は8頁へ）。

利用者さんとの懇談では、早速、それぞれの仕事振りについて質問。近久学さんは、お客様と厨房の動きすべてを見ながらホールを仕切っています。「お皿を下げるタイミングは、料理を食べ終わりに、お水を口にされてから10秒待つようにしています。決してお話のじやまにならないように心がけています」。血洗いの責任者の下森君子さんは、「昼も夜も大体60人分と大量の皿が使われます。でも必要以上人間が血洗いをしている、お店はまわっていきません。その日の予約状況を見ながら、今日は何名で血洗いをするかを私が判断します」と説明しました。

もうひとつの訪問先『ほのぼのの屋』は、第8回小倉昌男賞を受賞した施設です。「障がい者のお店だから仕方ない、そんな風にスタッフもお客様も妥協するお店にはしたくありませんでした」と職員の内海あきひさんは話します。その言葉が示すように、舞鶴港が見える店内には、一流シェフのつくった料理をゆつくりと楽しめる、大人のくつろぎの時間が流れてい

今日集まった利用者さんは、みんな月給10万円を超えていると聞き、またびつくり。お金の



野田川共同作業所で九条ネギの種蒔き作業を見学

の使い方を伺ってみると、アイロンがけ担当の内海あきひさんは「みんなでハワイ旅行に行きました、楽しかったので次はパリにいきたい」と目を輝かせます。バックヤード全体をマネジメントする六田宏さんは、3人のお子さんがいます。「いま家を買いたい、子供が小学校に通える範囲で物件を探しているところですよ」と大きな目標を持っていました。

「みんな生き生きとしていますね。どうすればお客様が喜ば



とり暮らしをはじめたい、結婚して自分たちの家を持つと張り切ったりと、大きく変わっていききました。そして10万円を超えると、今度は職場でリーダーシップを発揮するようになったんです。凄いは、自分たちで考え、いろいろな提案をしてくるようになったことですね。

たとえば、いままでアイロンがけは座って行っていたのですが「このクリーニング店を見ても立ち作業で行っている、椅子をどけても良いか」と彼らから言ってきました。2カ月ぐらい経って様子を聞くと、「作業スピードが3割ぐらいアップした、このまま続ける」と言われまして、いまは私

ちが指導される立場になっていきます(笑)。

理事長 自分たちの手で改善して成果を出す、評価される、これは仕事の醍醐味の一つですね。

西澤 ホールで働いている者と違ってバックヤードの人間は、お客様の評価を直接聞くことがほとんどないんです。しかも、きれいだからほめられることはなくても、汚ければクレームがきます。そんな裏方の仕事ですが、ある時、お客様に「ここは10年以上経つのに、いつもガラスがきれいだ」とほめてもらえました。私は早速、メンバーに伝えにいったんです。するとグラスを磨きながら「だって私たちはガラスの向こうに、お客様の笑顔が見えてるんだから」とすまして言うんですよ(笑)。うちのメンバーさんは、私の自慢です。誇りを持って働く彼らが、私の誇りです。

森下 みなさん生き生きと働いてますものね。その姿勢は仕事の原点というか、私たちがいつの間にか置き忘れてしまっているかもしれない大切なものだと感じました。しっかりポケットにしまっ、会社を持って帰りますよ。

理事長 我々もみなさんの気持ちのこもったお金が、生きたお金となるように、しっかりと助成などを行っていききたいと思います。今日は、お二人ともありがとうございます。

森下、西澤 こちらこそありがとうございました。



左から下森君子さん、六田宏さん、森下会長、近久学さん、内海あずさん



全員で連携してオープン前の準備

お客様が口につけるものだからと心を込めてクリーニング



舞鶴港を一望できるCAFE RESTAURANT「ほのほの屋」



一つひとつ丁寧にセッティング



素晴らしい料理とサービスに感激する森下会長

れるかを、全員が考えて行動していることが素晴らしい。ここではお店で過ごす時間も大切な商品になっていきますね。この訪問でいろいろなことを学べたと、森下会長は話しています。

私たちの賛助会費が活かされています
2013年度ジャンプアップ助成金贈呈施設

障がい者福祉助成金

助成先レポート

Vol. 19

手作業にこだわり

九条ネギで、時流の変化に立ち向かう

社会福祉法人 よここのうみ福祉会
野田川共同作業所
就労継続B型(京都府与謝郡)



野田川共同作業所九条ネギ班のみなさん、
後列左から田中兵庫支部執行委員長、ヤマト労連森下会長

長く地域に貢献してきた野田川共同作業所。9年前に挑戦を開始したブランド野菜の生産ですが、収益が安定しないのが悩みの種でした。しかし、大掛かりな設備投資に踏み切り、状況を大きく打破しようとしています。

京野菜の生産に名乗り

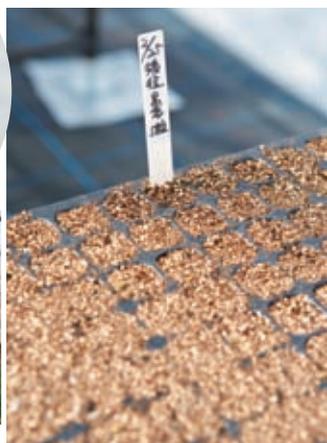
日本三景で唯一、日本海側に位置する「天橋立」。その美しい景観から野田川沿いに車で20分ほど上ったあたりに、野田川共同作業所があります。

ヤマトグループ企業労働組合連

合会の会長・森下明利さんと、兵庫支部執行委員長の田中秀信さんが訪れたこの日は、当財団のジャンプアップ助成金を活用して建設された大型ビニール育苗ハウスが稼働し始めてちょうど2週間というタイミング。ハウスの中では働く8名の利用者さんの姿がありました。



一つの小ほみに5粒ずつ種をまく細かい作業



播種から7日。よく見ると発芽が分かる



種から育てた苗

苗～収穫までの定植用ハウス。順調に育てば1棟で30万円ほどの売上になる

決め手は、苗の善し悪し

「事業の多角化を手探りしていた折り、本格的な農生産は未経験でしたが、農協等の指導を受けながら始めました」
しかし、九条ネギはとてもデリケートな野菜。一筋縄ではいきません。雪深い冬、高温になる夏は出荷量がグンと下がるのを避けられ

整った環境で働いてほしい カンパはその一助になる



●ヤマト運輸労働組合
兵庫支部執行委員長
田中秀信さん

ネギは好きなんですけど、これほど手間のかかるものとは知りませんでした。コツコツと根気のいる仕事なんですね。

細かい作業にも真面目に向かう様子は、主管支店で作業をしている障がいのある方といっしょ。明るく挨拶してくださるところも共通していました。

「力まず、じょうろの先を下に向けた方がラクですよ」と、利用者さんから水まきのコツを教わりましたが、楽しんで仕事をされているのが伝わってきました。

と同時に、私たちが何気なくカンパしたお金が、熱い想いを持って運営されている作業所で生かされている。育苗ハウスという形に姿をかえて、立派に役立っているのを目の当たりにして、うれしさが湧き上がってきました。

こちらのような、楽しく健やかに働ける場がどんどん広がってほしいと思います。



定植用ハウスで、水まきを手伝う田中委員長



新たに建てた育苗ハウスは雪の重みにも耐えられる仕様。室温が12℃を下回るとボイラーが自動運転する仕組みも。上水道を散水する設備や遮光カーテンも備えた

ませんでした。それでも府の授産振興センターの研修を受けたたり、相談に乗ってくれる園芸店の助けを借り、着実にノウハウを蓄えてきました。

九条ネギを担当している藤岡克彦さんは、「突き詰めていくとやっぱり苗。ネギ栽培はしつかりとしたよい苗を育てることで8割は

下請けリスク克服の武器に

決まることを学びました」と言います。それまで苗を育てていたのは、借り物の老朽化したハウス。水も電気も引いてありません。川の水は農業や雑菌の混入もあり、これまででは5ヶ離れた作業所から水道水を運んでいました。

そこでついに、しつかりとした設備の育苗ハウスを建てることを決断したのです。

藤岡さんは新しいハウスでの育苗に手応えを感じています。「びつくりするくらいです。7日間で発芽しました。この分だと今までの冬には3カ月かかっていた育苗が半分でできそうです」

昨年は年間19作でしたが、今年度は25作ぐらいまで伸ばせるかもしれないと。給料アップにつながる

る朗報です。

じつは電気ケーブルの下請け作業は昨年からの、受注量が大きく下がりました。発注元が海外での生産にシフトしたためです。そこで徐々に下請け作業を担当していた利用者さんたちに、九条ネギづくりに移ってもらえればと考えています。

「自然の空気を吸って、土に触れるの、もって元気になってもらえるのでは」と藤岡さん。小谷所長も「身近なラーメン屋さんやうどん屋さんで、自分たちの育てたネギを実際においしいと言ってもらえる機会があることは、給料だけでなく、やりがいにもつながります」と、効果に期待しています。

九条ネギの人気は年々高まっており、現在まで販路に困ったことはありません。むしろ生産が追い



ヤマト労連の森下会長も見学に

▶「九条ネギは水が多くても、温度が高くても低すぎてもダメ」栽培の指導にあたった園芸店「三光園」の三浦浩さん(左)と田中委員長



◀「三光園さんのような園芸のプロから指導を受けられたことが大きかった」と、これまでの苦労を語る小谷勝己所長(右)。九条ネギ班支援員の藤岡克彦さん(左)

つかない状況がつついていました。念願の育苗ハウスの完成で、設備面の体制は格好がよくなりました。あとは出荷の需要に合わせて、いかに人員を配置していくのが課題です。

農業をできる限り使わず、手作りにこだわって育てた安全安心の九条ネギ。郷土の伝統野菜で働く場の維持拡大、給料アップに挑む野田川共同作業所の今年度の成果が、今から楽しみです。

東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金

助成先を訪ねて



安心してくらし、働ける町へ 被災地3年目の春

震災から3年、いまだに多くの方が、さまざまな不安を抱えながら生活しています。「お年寄りも若い世代も、だれもが安心してくらし、働ける町へ」。住民に寄り添いながら被災地の復興は続いています。



〔鹿島厚生病院併設介護老人保健施設 厚寿苑の新設事業〕

(第5次助成) 福島県厚生農業協同組合連合会

高齢者医療・介護の新施設が完成 病床数、通所定員数は、約2倍に拡大



鹿島厚生病院屋上より見た完成した厚寿苑

〔新施設の概要〕 ●建物:鉄筋コンクリート造、地上3階建て
●敷地面積:2992.27㎡ ●延べ床面積:3647.17㎡ ●収容人員:病床数/100床、通所リハビリテーション/40人(2単位)
●施設には居室、機能訓練施設のほかに地域の方が集まれる地域交流スペースも併設

避難されてきた多くの高齢者もケアできる体制へ

「やっと町に戻れるようになって、高齢者の医療・介護体制が整っていないのは安心してくらし、とほできない」。そんな住民の声に、応え、急ぎ建設を進めてきたのが、

南相馬市にある鹿島厚生病院併設介護老人保健施設「厚寿苑」です。

南相馬市は、東日本大震災による津波被害および原発事故で、福島第一原子力発電所から30kmの範囲の一部地域が帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域に指定され、指定外地域に位置



オープニングのテープカット
左から2番目・内田和成東日本大震災復興支援選考委員会委員長、左から3番目・有富理事長



竣工式で挨拶する庄條徳一経営管理委員会会長(右)と
櫻井勝延南相馬市長(左)



入口エントランスに設置された竣工碑 震災の状況や助成への感謝の言葉が刻まれている

する鹿島区には多くの被災者が避難してきました。そのため鹿島区の人口は高齢者を中心に震災前から約2000名も増加。その一方で、病院は16施設から9施設へ、老健施設も8施設から4施設へと減少し、相双地域全体の医療・介護環境、特に老健施設など介護施設の改善は急務となりました。そこで、鹿島厚生病院併設介護老人保健施設「厚寿苑」を運営する福島県厚生農業協同組合連合会以下、JA福島厚生連は、この助成金を活かして、地域医療・介護サービスの充実、強化のため施設増床を計画。2013年1月に起工式が行われ、今年1月30日に竣工式を迎えました。

**地域復興のシンボルとして
南相馬市の希望の砦に**

竣工式でJ A福島厚生連の庄條徳一経営管理委員会会長は「高齢者医療・介護の充実を担う中核施設として、また地域復興のシンボルになりたい」と挨拶。櫻井勝延南相馬市長は「厚寿苑は南相馬市の希望の砦です」と祝辞を述べました。

ここには最新の介護、療養、リハビリ設備などの他に、全室に感染



日光浴もできる開放的な3階のテラス



明るく快適に整えられた居室



光がたっぷりに差し込む食堂



1階の広々としたリハビリテーション室



機械浴室、個室を備えた入浴施設



完成した厚寿苑を見学する内田選考委員会委員長（早稲田大学商学学術院教授）と有富理事長



厚寿苑を支えるスタッフ（左から西内光枝さん、青砥正事務長、市川聡さん、青田浩二さん、涌井美貴子さん）

防止を配慮したスーパードライ水の空間噴霧方式も導入しています。渡邊善二郎施設長は「こんなに素晴らしい施設を作っていただいたので、今後はスタッフの増員も図りながら、それに負けないサービスを実現したいと思います」と話しています。

**当時は残った全スタッフが
泊まり込みで高齢者をケア**

2月1日の開所を前に、スタッフは、喜びと安堵の気持ちで一杯

です。

「震災に襲われた時、私は通所されていた18名の方と一緒にいましたが、激しい地震にみなさん混乱状態になりました。なんとか平静に対処しようと、安全を確保してください」と呼びかける声も、つい大声になってしまったことを思い出します」と看護師の西内光枝さん。「とにかく全員を耐震構造となつていくデイケアスペースへと一旦移動してもらい、そこから帰宅できるように順次車でお送りし

**自分自身が入りたいと思う
充実したサービスを**

その後、利用者さんたちは、無事に被害の少なかった県南の三つの施設に分散して避難。残ったのは、壁に亀裂が入ったり、床の一部が盛り上がるなど、このままでは使用できない状態となった施設でした。

その後、避難が解除され、分散していた利用者さんも徐々に町に戻ってきました。しかし、急増した高齢者と減少した施設というギャップの中、旧施設の定員を遥かに上回る入所希望者が殺到しました。

「旧施設を改築してもキャパが少な過ぎる。新施設を建てるには、予算がない。そんな厳しい状況の中、助成が決まった時は、本当だろうかと驚きましたが、こうして立派な施設が完成し、心から感謝しています」と青砥正事務長は話します。

新施設は、これまでの58床から

ました。でも、海沿いに住む方は津波の恐れがあるため、道路を使わず、またここに戻ってくることにしました」と介護福祉士の青田浩二さん。入所されていた方52人と合わせ60人近くの方が、約1週間、ここで雑魚寝状態で過ごすことに。作業療法士の涌井美貴子さんは「おむつや薬などが不足してくると不安も募りました。当時、20名ほどのスタッフがいましたが、避難せざるを得ないスタッフもいて、残った者は当直を繰り返してケアにあたりました」と話します。

100床に拡充され、通所リハビリテーションの定員も1日20人から40人の2倍になります。

「全体に広々として、採光も配慮した快適な施設になりました。また旧施設は、病院をリフォームして建てられたもので、移動などで不便がありました。それもすべて改善されています」と青田さん。「リハビリ設備もより充実し、使い勝手も良くなっています。仮設住宅や借上住宅の生活によるストレスなどで認知症が進行する方も出ていますので、その介護や予防にも頑張りたいです」と話す涌井さんは、訪問リハビリも行っています。「仮設住宅などでは自分のペースでゆっくり入浴することができません。新施設には、介護が必要な方の機械浴室はもちろん、個室もありましたので、のんびり寛いでいただければと思います」と西内さん。青砥事務長は「みなさんに楽しんでいただけるように、ここには地域の方と入居者や通所者が交流できるスペースも設けています。30年、40年後に、自分が入りたいと思える、そんな施設にしていきたいですね」と話しています。

被災地での生活は、高齢者はもちろん、家族の負担も大きく大変です。いま南相馬市では、約3人に1人が高齢者と言われ、新施設の入所待機者は306名にもなっています。

現在、順次利用者の入所受け入れを実施しており、新年度にはフル稼働になる予定です。

〔仮設水産加工場施設設備整備事業〕

(第5次助成) 気仙沼水産加工業協同組合

地元の食材で
商品を開発し
水産加工業を
盛り返したい



それぞれ得意な加工技術を活かし二次・三次加工商品を製造

工場も家も失ったが
仮設水産加工団地で再出発

震災前、気仙沼魚市場は、生鮮カツオで全国一、他にもマグロやサンマ、サメ類などの水揚げも盛んでした。市場周辺や大川河口付近には、カツオの生利節、サンマ、サバ、イカなどの水産加工会社の工場が建ち並び、町の主力産業となっていました。ところが、その大半が津波に飲み込まれてしまいました。「自宅もろとも流され、工場を再建する資金などとても工面できない」。そんな組合員の悲痛な声に、気仙沼水産加工業協同組合は、共同で作業できる仮設水産加工団地を計画。しかし、国や団体からの支援は建物だけでした。そこでこの助成を活用し、敷地内のインフラや内装工事、さらに組合員の設備、

機材などの購入も進めます。バラバラになっていた組合員も次第に集まり、計9社が仮設水産加工団地で事業を再開。2012年9月、晴れて竣工式を迎えました。竣工式の様子と再開した5社の姿を以前本紙36号で紹介しましたが、今回は、その後スタートした4つの会社について報告します。

(有)マルナリ水産
工場も家も失ったが
仮設水産加工団地で再出発

従業員を避難させ、一人工場に残った植木実社長は、逃げ遅れて津波に襲われました。「なんとか自宅の屋根に登りましたが、家と一緒に3日間も流されました。周りの水が引かず、食糧も水もなく、服も濡れたままでもう限界でし

た」。まさに九死に一生を得たものの、家も工場もすべて失うことに。地元の土産店、問屋などに納めるサンマの昆布巻の売上が伸びはじめ、これからという時でした。そのため仮設水産加工団地の話を聞いてもなかなか決心がつきません。「外で働いていた息子に、やるなら俺が手を貸すと言われたこと。また、地元の納品先からも、つくったから一生懸命売って持っていくと声をかけてもらったのが後押しになりました。ただ資金集めが大変



家族一丸となって事業を再開



昆布巻きをつくる植木社長(右)

で、この助成がなかったらあきらめていたと思います」。マルナリ水産が、工場を再開できたのは竣工式の3カ月後。工場は以前の約半分の規模になりました。

「従来通り仕事を行うには設備も足りず、昆布巻きを主力に方向転換しました。サンマの昆布巻である程度成功していましたが、これで第2弾、第3弾とバリエーションを増やしていくつもりです。中に入れる物もサンマだけではなくニシンやサケなど、気仙沼らしさを出せる商品にしたいと考えています」。

マルエイ千田商店

商品の種類を増やし
個人直販に専念しています

「いままでにはない凄い揺れだったので、これは津波が来ると、女房と別々の車で避難しました。すでに道路は大渋滞でしたので、避難所と逆方向のホテルの駐車場に逃げ込みました。ところが女房の車が来ていない。慌てて周りの建物を探すと、魚市場の屋上にいる姿が見えてほっとしました」とマルエイ千田商店の千田裕さん。そこで津波が町を飲み込んでいく姿を目撃します。大川河口近くにあった工場は、跡形もなくなっていました。「しばらくは力も出なくてボーっと過ごしていました。仮設団地の話がなかったらどうなっていたか」と振り返ります。



商品は10種類から18種類に



まさにゼロからの再出発だったと千田さん(右)

事業を再開できた時は、震災から一年半が経ち、取引先だったスーパーなどにはすでに別の業者が入っていました。「ほとんどゼロからの再スタートでした」と千田さん。震災前、個人直販の仕事が増えていましたが、そのお客様情報も津波で失ってしまいました。「住宅地図を見て、記憶を辿り、仕事を再開した案内を送りました。その甲斐あってお客様も少しずつ増え、いまうちの仕事の99%を個人直販が占めています。商品は、サンマの南蛮漬(サンマキムチ)などをつくっていましたが、直販ならやっぱり種類が多い方が良く、レパートリーを広げています」。

大弘水産(株)

当たり前にあつたもの
その大切さをヒシヒシと痛感

工場は、幹線道路から道を一本入った所でしたが、車両が入れるようになつたのは、震災から2カ月も後。「従業員と一緒にガレキをかき出し、使える備品を取り出し別の場所に移動して洗浄する、これの繰り返しでした」と小野寺



大弘水産のみなさん(写真右が小野寺専務)



自社の特技を活かした商品を製造

大輔専務取締役。しかし、地盤沈下が発生したこの土地での再建は数年先も困難な状況に。「それでここに入居したのですが、今度は配管などの工事が進まず、周りからいつはじめるのと聞かれるのが辛かった」。業務を再開できたのは仮設水産加工団地で一番遅く、従業員も半数に減りました。

「それでも再開すると、当社の燻製ノウハウで、こんなものがつくれないかと新しい依頼をいただきました。この燻製品やメサバ、ホッケ醤油味鮎などは、問屋さんなども好意的に迎えてくれました。また給食関係の仕事も再開できています。こうしたお客様の存在はもちろん、いままで当たり前にあつたものの大切さをヒシヒシと感じました。いまはお客様に満足いただける商品をつくることを一番に考え、盛り返していきたいと思えます」。

(有)林健商店

サケの削り節など新商品で
少しでも販路を拡大したい

「グラグラつときて慌てて道路に出ると、とても立っていられない状況でした。四つん這いになりこらえていると、今度は液状化で側溝と側溝の間からパーッと水が吹き上がったんです」と林健商店の林孝輔代表取締役は話します。道路は渋滞して車での避難は無理だと、高台まで歩いて逃げ延びました。カツオ、サバの生利節製造を

林健商店のみなさん(中央が林さん)



サメの心臓の燻製を試作

行っていた工場は、津波に流され、もうやめるしかないと言っていた時に、仮設水産加工団地の話が届きます。

「うちはじいちゃんの代、昭和13年からやってましたから、頑張れる間は続けたいと思いましたが、1年半のブランクと環境が変わったせいもあって、最初は思ったようにうまく製品をつくれず、つまづきながらの再出発でした。お客様も仕事量も約半分に減っています。が、組合員同士で励まし合い、販路の拡大に挑んでいます。「サケの削り節やサメの心臓の燻製などをつくりはじめました。いまこの新商品を新しいお客様に卸し、販売してもらっています。これで、少しでも仕事が増えたらと踏ん張っているところです」。

サケの削り節など新商品で
少しでも販路を拡大したい

2013年7月、組合員が原料や商品を冷蔵保存できる新倉庫が完成しました。「仮設水産加工団地に助成いただいたお陰で、国や県、市などの援助を冷蔵倉庫や事務所などにまわすことができました」



サバの生利節の出荷作業



衛生的で高品質に管理できる最新設備を導入した「赤岩冷蔵工場」

た。震災後、長期保管できる施設が足りず苦労してきた組合員にとつて大きな一歩です」と気仙沼水産加工業協同組合の熊谷昌二常務理事は話します。必要な施設を一つずつ整備しながら、気仙沼市の水産加工業は再生への道を進んでいます。

[製氷・貯氷施設回復支援事業]

(第3次助成先)

久慈市の漁業復興を支える
全17施設が完成し祝賀会を開催

岩手県

無事に竣工しました。これを節目に、今後は漁業復興に邁進します」

2014年1月27日、久慈市漁協は、第3次助成で2012年12月に完成、稼働していた製氷・貯氷施設をはじめ、17の施設の完成を祝う「製氷保管施設等復旧支援事業竣工祝賀会」を開催しました。久慈市漁協の林健一郎代表理事組合長は「久慈で水揚げされる水産物の付加価値を高める製氷・貯氷施設など全17施設が無事に竣工しました。これを節目に、今後は漁業復興に邁進します」



製氷能力1日50t、貯氷能力約2000tの製氷・貯氷施設

と挨拶。山内隆文久慈市長(当時)も「地域活性化の要である水産業をみんなで盛り上げたい」と今後の決意を新たにしています。

寄稿

ヤマト福祉財団は、国連障害者権利条約の批准に向けて、平成16年から損保ジャパン記念財団、キリン福祉財団とともに、国連に参加出席したNGO「日本障害者フォーラム」に対して10年にわたり共同助成を行ってきました。批准を機に日本障害者フォーラム（JDF）幹事会議長でもある藤井克徳さんにご寄稿いただきました。

障害者権利条約批准で問われる私たちの社会

きょうされん常務理事 藤井 克徳



Profile

1949年、福井県生まれ。1970年代、都立小平養護学校（現・都立小平特別支援学校）教諭在職中に、地域の共同作業所づくりや共同作業所全国連絡会（現在のきょうされん）結成に参加。主な現職は、内閣府：障害者政策委員会委員長代理、日本障害者フォーラム幹事会議長、日本障害者協議会常務理事、きょうされん常務理事など。

■きょうされんはメキシコ大統領の提唱

障がいのある人に関わって、大きな出来事が出現した。過去をふり返り、また近未来を見渡しても、これほどの出来事はないように思う。それは、国連で定めた障害者権利条約（以下、権利条約）を日本が受け入れたことである。国際条約を国会承認を経て受け入れることを批准と言うが、2014年1月20日がその日となった。日本の障がい分野の歴史にあって忘れることのできない記念日となろう。以下、権利条約についての経過や内容の特徴、政策上の効力、日本社会への影響について略述する。

本論に先立って、「障がい」について考えてみたい。日本における障がいの数は、厚労省の最新データによると、約788万人である（全人口に占める割合は約6%）。ただし、この数は身体障害者、知的障害者、精神障害者のみで、難病や発達障害、脳血管障害などにある者の多くは含まれていない。ちなみに、WHOは障がいの数を全人口の15%とし、米国は20%、欧州連合（EU）は15%にしている。もはや少数層とは言えず、欧米では障がいのある人を指して「最大のマイノリティ」と称している。こうしたデータとは別に、高齢による障がいを伴う確率はきわめて高く、そもそも人間は、最期の段階で例外なく「障がい」をくぐることになる。そういう意味では障がいの問題は人類共通のテーマと言ってよからう。

最初に権利条約の経過と背景をふり返ってみよう。直接のきっかけは、2001年の第56回国連総会でのメキシコ大統

領の「障害者権利条約の制定」の提唱であった。これを受けて、「権利条約に関する特別委員会」が設置され、公式な検討に入っていた。特別委員会は8回にわたって開催され（一回当たりの会期は2週間～3週間）、2006年8月の第8回特別委員会での仮採択を経て、同年12月13日開催の総会（第61回）において本採択に至った。その背景には、「障がい分野の遅れを放置してはならない」とする国際的な機運の高まりがあり、女性差別撤廃条約や子どもの権利条約など既存の人権条約の深部からの後押しがあったことを忘れてはならない。

■あるべき社会への処方箋

25項目の前文と50箇条の本則から成る権利条約であるが、二点に絞って特色を述べたい。一つは、誕生までの過程に特筆すべきことがあったことである。通常、条約の策定作業は政府間交渉であり、民間が入る余地はない。権利条約は異なっていた。述べ100日に及ぶ審議の過程にあって、重要なステージでの障がい当事者（国際NGOの代表）の発言が確保された。「Nothing About Us Without Us（私たち抜きに私たちのことを決めない）」は、国連の議場に染み入るようになり返された。一貫して、条約の主体である障がい者を審議の内側に据えていた。権利条約の価値の高さはこのことと無縁ではなさそうである。

今一つは、内容面で新たな地平を開いたことである。障がいのとらえ方などはその典型と言えよう。簡単に言えば、障がいの本質は社会の側に存在するという立場を明確にしたことで

ある。これまでは手足のマヒや目が見えないこと、耳が聞こえないなど個人に属する障がいのみを問題としてきた。権利条約はこれを転換させ、障がいと言うのは障がい者を取り巻く環境要因（社会的障壁）との関係で重くもなれば軽くもなるとした。まさに、障がい観のパラダイムシフトである。また権利条約は障がい者に対して新たな権利や特別な権利の付与という考え方を一切取っていない。もっぱらくり返しているのが「他の者との平等」（このフレーズは35回登場）で、同年齢の市民との平等性の追求をポイントにしているのである。

最後に、批准が成った条約の効力をどうみるか、また条約と日本社会との関係について触れておく。憲法には「締結した条約は遵守する」とあり、一般法律の上位に位置づけられることになる。条約が障がい関連の法律を拘束し、条約の水準との関係が問われることになる。労働及び雇用、教育、生活など障がい者に関するあらゆる分野で新たな目標値が設定されたと言ってよからう。

かつて国連は、「障がい者をしめ出す社会は弱くもろい」と言い放った。先の東日本大震災においては、障がい者の死亡率が全住民の死亡率の2倍であることが判明した。まだまだ弱くもろいのがこの国なのである。権利条約は、一見して「障がい者のための条約」と思われがちであるが、そうではない。「障がい者が住みよい社会は誰もが住みよい社会」を切に訴えているのであり、あるべき社会への処方箋なのである。権利条約の浸透度、それはそのままこの国の人権意識のバロメータと言ってよからう。



「彼なら責任ある仕事も任せられる」と期待されている糸山さん。給料を貯めて家族を旅行に連れていく、そんな夢を持っています。

給料を貯めて 家族を旅行に連れていきたい

先輩従業員と一緒に。藤原友幸所長(右)と糸山豪太さん(右から2番目)

■ヤマト自立センター スワン工舎新座 就労に必要なスキルの習得はもろん就労先の開拓からジョブコーチによる就労後のサポートまで一貫したプログラムで、障がい者の自立支援に取り組んでいます。

■株式会社キューソーエルプラン中日本 食品物流でトップシェアを持つキューソー流通システムグループの一角として、武蔵野・東京・神奈川・名古屋の4ブロックでスーパーなどに届ける食品の倉庫管理・配送事業を行っています。



機械が読み取れなかった商品の仕分けを行います



行き先別の配送車に積み込む商品を移動します



空で戻った台車は、次のラインへ

糸山豪太さん (株) キューソーエルプラン中日本 武蔵野ブロック営業所(平成24年12月10日入社) 糸山さんの趣味はサイクリング。休日には友人と自宅の埼玉からスカイツリーなどに出かけることも。また、大好きなAKB48の握手会にも出かける行動派です。



店舗ラインを担当できる力もついてきたと藤原友幸所長

より責任ある仕事も任せたい糸山さんならきつとできます

糸山さんが武蔵野第一ブロックサミット営業所に勤めて、約1年4カ月が経ちます。「職場の人はみんなあたたかくて、いろんなことをやさしく教えてくれました」と糸山さん。営業所では、毎日、大量の商品を複数の店舗に向けて出荷します。出荷商品は、機械が自動的に店舗ごとの積み込みラインに仕分けし、担当者トラックに積み込みます。この時、機械が読み取れなかった商品はフォロワーラインに送られ、人の手で仕分けしますが、この仕事を担当しているのが糸山さんです。

糸山さんは、いつも明るく元気いっぱい。職場ではムードメーカー的な存在です。「私がここに赴任した時、これから従業員のみなさんの顔と名前を一人ずつ覚えていきます」と挨拶したのですが、一番最初に自己紹介に来てくれたのが糸山さんでした。営業所約40名の従業員の中で真っ先に名前を覚えたのが、糸山さんです」と藤原友幸所長

「大雪の日、私が会社に着いた時、糸山さんはすでに仕事を始めていて、その真面目さに感心しました」と話す藤原所長。「糸山さんには、今後は店舗ラインも担当してもらいたいと考えています。より責任の重い仕事ですが、糸山さんならきつとできると期待しています」。

現在、糸山さんは、フォロワーラインを一人で任せられるようになり、時給も900円に昇給しました。「仕事は楽しいですし、給料がもらえてうれしいです。この仕事をずっと続け、お金を貯めて家族を旅行に連れていきたい。親孝行がしたいです」と話しています。

糸山さんの他にも、この営業所には11名の障がいのある方が働いています。中には勤続17年になるベテランもいます。「私たちは、入社前に10日間の現場研修を行い、本人の働く意欲や仕事の適正などを判断するようにしています。ここでの仕事は、糸山さんが担当している体力の必要な作業、袋・箱詰めといった細かな作業、他にも清掃作業などに細分化されていますので、自分に適した仕事に就くことができます」。

長は話します。



糸山さんの勤務する営業所
勤務時間は8:00~17:00です

この街で、
一緒に生きていく。



公益財団法人ヤマト福祉財団
障がい者のクロネコメール便配達事業

変化する町と一緒に、 自分たちの地図も新しくなる。

岩手県矢巾町。JR盛岡駅より東北本線で3駅目の矢幅駅から、歩いて約5分。新しい住宅が次々と建ち、大きく変化する町の中に「あさあけの園」があります。メール配達事業を始めて9年目。3人のメイトさんを中心に、多くの利用者さんもひとつとなって、楽しく仕事を進めています。職員の方も頼りにするというベテランのメイトさんたちの仕事ぶりを伺いました。

「あさあけの園」がある矢巾町は、今、めざましく変化しています。平成19年から、矢巾町に盛岡市の岩手医科大学と付属病院の総合移転整備事業が展開されているのです。区画

しい住宅地に。工事現場が多く、通行止めや迂回の表示がそこそこあります。あさあけの園がメール配達事業を始めたのは、9年前。数年前からの町の変化と一年前の配達エリア

の拡大で、新しい配達先が一気に増加しています。住所の確認など、困惑することが増える中、それが逆にベテランのメイトさんたちの新たなやりがいとなっているようです。

みんなで仕分けて、住所の 一覧表をしっかりとチェック。

朝9時過ぎ、ヤマト運輸のトラックが到着。朝一番に来所する古坐拓也さんが、いつもメール便を受け取ります。さっそくAからMと書かれた大きなテーブルで、担当地域の仕分けを開始。古坐さんは仕分けを手伝って約6ヶ月で番地の区分けや段取りを覚え、約1年で任されるようになったといいます。その間に、利用者さんに乗せた送迎バスが到着。利用者さんは早速、いくつかのテーブルに分かれて、次々と仕分けを始めました。あさあけの園では、メイトさんや職員だけでなく、利用者さんたちも仕分け作業に参加しているのです。



地図に配達する順番を書き込んでいく高木さん。

●岩手主管支店 矢巾センター

面積07.28km²/人口26,706人/世帯数9,242世帯

●社会福祉法人 新生活会 就労継続B型施設 あさあけの園

2005年からメール配達事業を開始。1日の平均配達数、約200冊。その他の活動は、菓子作り、珈琲焙煎、清掃作業、枝豆選別作業など。

「障がい者のクロネコメール配達事業」

参入施設数 321施設 従事者数 1,657人(2014年2月現在)

お問い合わせは……(公財)ヤマト福祉財団 メール便担当

TEL 03-3248-0691 FAX 03-3542-5165

<http://www.yamato-fukushi.jp/>

独自のルートを徒歩で配達。

配達を担当しているメイトさんの寒風信昭さんは9年目、高木正春さ



メイトさんになって9年目のベテラン寒風信昭さん(左)と1年目の中村国義(右)さん。配達するとき、二人は一緒に出発し、途中から分かれて、また合流するルートが定番です。「分からないことは寒風さんに聞いています。どんなことでも、すぐに答えが返ってくる場所がすごいです」と中村さんは寒風さんを信頼しています。



写真上/朝のメール便の受け取りは、古坐拓也さんの仕事。朝一番に来所して、ヤマト運輸の到着を待っています。写真下/住所の一覧表に本日の配達先をチェックし、マーカーで塗っていく寒風さん(左)と中村さん(右)。丁寧に確認しながら仕事を進めます。



配達数を増やしたいという願いが叶って、エリアが広がった高木正春さん。工事現場が多いため、通行止めの道や、工事中でも通ることのできる道を覚えて、翌日の配達ルートを決めています。「学校の先生の家に配達したり、同級生に声をかけられたりすることがうれしく感じます。」

さんは8年目とベテラン。中村国義さんはまだ1年目なので、広い地域を担当する寒風さんの助手をしながら、配達地域を少しずつ広げています。朝、3人はメール便の持ち出し登録をし、冊数を確認しながら地図の上にマーカーでチェック。次に、配達順に番号をつけ、その順番どおりにメール便を重ねていきます。数冊まとめて配達するメール便は輪ゴムでくくり、ゆっくりとそれぞれのペースで配達の手準備を終わらせていきます。

「配達する順序やルート作りも、メイトさんに任せています。職員がこちらの方が早いのではと思うルー

トもありますが、それぞれのメイトさんの歩き方があるようです」と熊谷みを子施設長。「あさあけの園」では、カートを使って徒歩で配達しています。雨や雪でも濡れないしっかりとしたプラスチックケースに入れて、この日も元気に出発しました。

頭の中の地図も、更新中。

寒風さんも高木さんも、この町の地図が頭に入っています。しかし、新築ラッシュと転入転出が多いため、常に更新が必要です。寒風さんは変化があれば必ずメモをとり、戻ってから記録。配達エリア内での移動なら、転居先の住所も覚えているようにしています。高木さんは、配達中に工事で通れなかった道を覚えておき、翌日の配達ルートを変更します。頭の中の地図も更新しながら、毎日配達を続けているメイトさんたち。変化する町ならではの苦労がある、と感じました。

携帯電話で密に連絡して、時間や労力のロスを軽減。

「あさあけの園」では、1日平均200通のメール便を配達しています。が、時には600通になることも。配達に使っているカートは小さいため、たくさんメール便を一度に全部は入れられません。そのため、多い日はメール便を半分だけ持って出て、残りの半分は、職員にメイトさんのいる場所まで車で届けてもらう

そうです。これはメイトさんが携帯電話を持つことで、できるようになりました。いつも配達が終わると、電話で終了報告をしてから戻るのがルールです。終了報告後の高木さんの戻りが早いので職員が尋ねると、「いつもの道で踏切が開くまで待っているより、遠回りをして駅の中を通ってくる方が早い」と答えたとか。配達の回り方だけでなく、帰り道にもそれぞれのルートがありました。

ヤマト運輸に就職が決定。生きがいを見つけた。

日下尚子さんが施設に通い始めたきっかけは、「あさあけの園」のメール便配達を知ったことでした。辛い病気の後のリハビリとして、何かできることがあるかもしれないと考え



いつも笑顔で配達をする寒風さん(右)。雨の日には屋根のある場所でケースを開け、メール便が濡れないようにするなど、細心の注意を払います。



写真左/「メール便によって、みんなが仕事を楽しんでいることが何よりうれしいです。お給料が月3千円位だった方が、メイトさんになって10倍の約3万円になりました。でも、利用者さんはまだ平均1万円位です。みんなの夢を叶えるのが職員の仕事。だから、もっと仕事の機会を与えられるよう、さまざまな方面に働きかけていきたい」と熊谷みを子施設長は話します。写真右/ヤマト運輸に就職が決まった日下尚子さん。「おしゃれが大好きだから、お給料で洋服を買いたい」と明るく話します。

たのです。そこで出会ったのは、仕分けや住所録修正などの作業だけでなく、寒風さんたちのハツラツとした仕事ぶりだったと言います。「みんながやさしくて明るいことに励まされたし、ここが自分の居場所に思えました」。日下さんは、この春、ヤマト福祉財団東北支部の働きかけによって、ヤマト運輸に就職が決定。「ヤマトさんとは縁を感じます。心に障がいがあっても、健康であれば、働く喜びに出会えると実感しました」とこやかに話します。

チームワークに今後も期待。

ヤマト運輸岩手主管支店 サービスセンター鈴木孝課長は「仕分け、記載など、施設の中がシステム化されていて、レベルが高いですね。情報が共有されているから、誤配が少ないでしょう。先輩後輩のチームワークが素晴らしい」と話します。ヤ

マト運輸矢巾柴波支店 小原正弘支店長は、「取り組み方や責任感など、仕事の内容がプロだと感じます。地域に密着したきめ細かいサービスをしていることが、誤配の少なさに表れています」。そして、今後も「あさあけの園」の活動に期待していると結びました。

「明るく、楽しく、元氣よく」あさあけの園では、毎日朝礼の後、みんなで大きな声で唱和します。この合言葉通り、生まれ変わりがつある町の地図を書き換えながら、メイトさんたちは今日もイキイキと配達を続けています。



前列向かって左から「あさあけの園」熊谷みを子施設長、土庄拓也さん、日下尚子さん、あさあけの園職員、小網ゆかさん、後列向かって左から、ヤマト運輸岩手主管支店、サービスセンター鈴木孝課長(4月1日付、メール便課長)、ヤマト福祉財団東北支部、小原守事務長、高木正春さん、寒風信昭さん、中村国義さん、ヤマト運輸矢巾柴波支店、小原正弘支店長、あさあけの園寺山美紀支援課長

[第6回卒業者の集い]

2月1日(土)、スワン工舎新座の「第6回卒業者の集い」が開催され、歴代の卒業生54名が集まりました。

今年で8年目を迎えるスワン工舎新座は、これまでに122名が卒業し、100名の方が就労を実現しています。平成25年度も卒業生15名全員が一般就労を達成し、それぞれの職場で活躍しています。



平成25年度卒業生は15名。うち10名が出席しました

8年間で100名の卒業生が就労を達成しています。



挨拶を行う有富理事長



話に聞き入る出席者
(最前列が平成25年度卒業生)



「次はスワン工舎羽田の卒業生も一緒に」と
瀧澤常務

給料を手にすることは
夢をかなえる一歩

久しぶりに再会した仲間と楽しそうに声をかけ合う卒業生たち。そんな出席者に有富理事長は「仕事をするといいことは、朝早くから出勤したりいろいろ大変なこともあります。働く達成感とお給料も手に入れることができます。お給料をもらうということは、みなさんの夢の実現に大きくプラスになることです。なかなか悩んだ時にはここにいる仲間、そしてスワン

工舎のスタッフといつでもコミュニケーションを取り、これからも仕事を続けられるように頑張ってください」とエールを贈りました。

平成25年度卒業生が
社会で活躍する姿を紹介

その後は、今回出席した歴代の卒業生を一人ずつ紹介。続いて平成25年度の卒業生に卒業修了書を贈呈しました。有富理事長より一人ひとりに修了書と記念品が手渡される間、各人が働いている姿や職場風景などが会場内でスライド上映されました。

SBSゼンツウ(株)東部営業所で荷物の仕上げ、整理を担当し、なくてはならない戦力と頼りにされている鈴木重成さん。渡辺パイプ(株)で倉庫管理からデスクワークまで担当し、その丁寧な仕事振りが高く評価されている清水尚幸さん。(独)国立国際医療研究センターのクリーニングスタッフとして初めて仕事に就き、初の給料を手にした矢野宏樹さん。ここには、清掃スタッフとして三澤千香さんも勤務しています。他にも、元気に社会で頑張る卒業生の姿が次々と紹介されました。

仲間とのきずなが
もつと広がることを願って

懇談会の前には、スワン工舎新座の瀧澤常務から「本日はたくさんの方の卒業生の笑顔を拝見でき、大変うれしく思います。昨年10月に設立したスワン工舎羽田からも卒業生が生まれましたら、次は一緒に集まり、きずなを深めたいと願っています」と挨拶がありました。

懇談会では、卒業生もご家族も、懐かしい仲間との再会を楽しみ、近況を報告し合うなど、改めて交流を深めました。



一人ひとりに修了書を授与しました

卒業修了書の授与の間、各人の働く姿をスライドで紹介しました

ジャンプアップ助成金で購入したトラックを安全に運転するために —安全運転研修—

平成25年度のジャンプアップ助成金決定で2tトラックを購入することになった「第1レンコンの家」(千葉県市川市)。「運転することへの安全面に対して大きな不安」があったそうです。ヤマト福祉財団ではこの不安を解消するために助成金の一部で安全運転研修を企画実施しました。

「安全運転・安全作業の取り組み」研修は平成26年1月17日ヤマトオートワークス(株)船橋工場で、第1レンコンの家の林圭子理事長、船瀬悟施設長をはじめとした8人の職員が参加し、日常点検や駐車などの「実技」と

安全運転のポイントなどの「講義」のカリキュラム構成で行われました。「死角の広さと左右ミラーの写影の違いには驚かされた」という参加者の感想が安全運転研修の大切さを物



助成金で購入した2tトラック

語っています。第1レンコンの家では材料の引き取りや製品の納品を一括で行うためにこのトラックを使用するそうです。利用者さんの給料アップのためにこのトラックを安全運転で十分に活用していただきたいと思います。



死角に入った子どもは見えません(安全運転研修の様子)

伊東屋さま、社員のみなさま 今年もご協力 ありがとうございました

今年も、東京・銀座の文房具専門店、伊東屋さまより、カレンダーのご寄付をいただき、そのカレンダーをヤマト運輸支社・主管支店などで販売いたしました。多くの社員のみなさまのご協力を得て、収益金が30万7212円になり、ヤマト自立センターへ寄付いたしました。毎年のご協力ありがとうございました。



独自にポスターを作り、協力していただいた愛媛主管支店のみなさん



仕上げを手伝っていただいた東京支社のみなさん

広島ケナフの会にもご協力いただきました

第15回ヤマト福祉財団 小倉昌男賞募集

障がいのある方にもっと働く喜びと生きがいを…みなさまの周りで障がい者の自立支援などに取り組んでいる方を

『第15回ヤマト福祉財団 小倉昌男賞』にご推薦ください。

※詳しくはホームページ
<http://www.yamato-fukushi.jp/works/award/>
をご覧ください



- 【賞の内容】
- 正賞…雨宮 淳氏作ブロンズ像「愛」/副賞…賞金100万円
 - 受賞者数…2名
 - 募集方法…賞の候補者は、障がい者および障がい者福祉関係者の中から「推薦形式」によって募集します。ただし「他薦」とします。
 - 募集期間…平成26年7月1日(火)から9月15日(月)まで

本誌第41号P2記事中、お名前記述に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
誤→坂本光さん
正→坂本光司さん



Information of the Art

バルテュス展

国内最大規模、 没後初の大回顧展

バルテュス《地中海の猫》 1949年 油彩、カンヴァス 127x185cm 個人蔵



バルテュス《夢見るテレーズ》
1938年 油彩、カンヴァス
150x130.2cm
メトロポリタン美術館
Jacques and Natasha
Gelman Collection, 1998
(1999.363.2). Photo:
Malcolm Varon.
© The Metropolitan
Museum of Art. Image
source: Art Resource, NY



バルテュス《猫たちの王》
1935年 油彩、カンヴァス
78x49.5cm
バルテュス財団 (ヴヴェ、イエニツ
シュ美術館寄託)
© Fondation Balthus,
dépôt Musée Jenisch
Vevey



孤高の画家バルテュスの 全貌を紹介

本展は孤高の画家バルテュス(本名バルタザール・クロソフスキー・ド・ローラ:1908-2001)の初期から晩年までの作品を通して、創造の軌跡をたどる国内最大規模、没後初の大回顧展です。ポンピドゥー・センターやメトロポリタン美術館のコレクションや個人所蔵の作品など世界中から集う40点以上の油彩画の他、素描や愛用品など合わせて100点以上を紹介し、世界で初めて晩年のアトリエを再現します。

「20世紀最後の巨匠」と言わしめたバルテュス

ピカソをして「20世紀最後の巨匠」と言わしめたバルテュス

開催期間▶2014年4月19日(土)~6月22日(日)
休室日▶月曜日、5月7日(水) ※ただし4月28日(月)、5月5日(月・祝)は開室
開催場所▶東京都美術館 企画展示室
アクセス▶●JR上野駅「公園口」より徒歩7分
●東京メトロ銀座線・日比谷線上野駅「7番出口」より徒歩10分
●京成電鉄京成上野駅より徒歩10分
※同館には駐車場はありません
開室時間▶9:30~17:00
※特別展開催中の金曜日は9:30~20:00
※入室は閉室時間の30分前まで

観覧料▶

	一般	学生	高校生	65歳以上
当日	1,600円	1,300円	800円	1,000円

○中学生以下は無料
○身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・被爆者手帳をお持ちの方とその付添いの方(1名まで)は無料 ※証明できるものをご持参ください
主 催▶東京都美術館(公益財団法人東京都歴史文化財団)、NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社
後 援▶スイス大使館、フランス大使館/アンステイチュ・フランセ日本
協 賛▶凸版印刷、三井住友海上
協 力▶エールフランス航空、スイス インターナショナル エアラインズ、全日本空輸、日本貨物航空
問い合わせ先▶<http://balthus2014.jp/> TEL 03-5777-8600 (ハローダイヤル)
巡回情報▶京都会場 京都市美術館 2014年7月5日(土)~9月7日(日)

は、パリに生まれ、美術学校に通わずに絵画を習得しました。《夢見るテレーズ》に代表される少女のいる室内画(時には猫や兄弟とともに描かれる)や静謐な風景画など、神秘的で緊迫感にあふれる彼の絵画は多くの人々に愛され続けています。1967年には日本人の出田節子さんと結婚し、1991年には高松宮殿下記念世界文化賞を受賞するなど日本とも深い関わりを持つバルテュスを一望する本展覧会は節子夫人の全面的な協力を得て開催の運びとなりました。是非お楽しみください。
本展の美術品取り扱いにヤマトロジスティクス株式会社は協力しています。

平成26年度 障がい者の働く場「パワーアップフォーラム」のお知らせ



- 東京会場
全社協 灘尾ホール(千代田区霞が関)
7月11日(金) 10:00~17:00
- 大阪会場
大阪国際会議場(大阪市北区中之島)
7月25日(金) 10:00~17:00

日程と会場

お申込みについて

- 参加対象…福祉施設関係者、本人、ご家族ほか、障がい者の働く場づくりに関心のある方々
- 参加定員…各会場200名
- 費用…参加費は無料、昼食500円(事前予約のみ)
- 参加登録方法…詳しくはヤマト福祉財団のホームページをご覧ください



読みやすさを追求した書体

